

らしっく

自分らしく、粋な暮らし

2005.1
息吹号
Vol.10



らしっくは、自分らしく、
粋な暮らしを目指す人たちを
応援する情報誌です。

広島市まちづくり市民交流プラザ情報誌

子育てで「**ドドジどしっく**」
子育て中のママによる地域の子育て向上委員会
広島市児童育成計画改定検討委員会
安東小学校の幼・保・小連携教育
ひろしまチャイルドライン子どもステーション
千田父親クラブ
マツダ株式会社
株式会社フエスタ

ひろしまぐるっと八区
(東区)二葉の里歴史の散歩道
(佐伯区)海老山公園

「子育て」
子育てまっ最中のお母さん、お父さんのグループ、また地域の子育てグループ、そして企業、行政…。さまざまな視点から、子育てを見つめてみました。



ビビッとアンテナを張り巡らせている人は、いつもvividに(イキイキと)生きています。そんな方々のchic(粋)な活動をご紹介しますこのコーナー。さあ、あなたもビビッと、しっくに暮らしてみませんか？

地域で支えあう

子育て中のママによる地域の 子育て向上委員会

夫の転勤で地元を離れ、悩みを抱えたまま子どもと自宅で過ごす人が増えています。大河公民館では昨年10月に託児付きの講座「子育ておし

やべりサロン」を開き、「あそび・まなび ネット広島」の香川恭子さんを講師にさまざまな悩みを話し合いました。この講座は地域の人たちの声をきか

に企画。子育てを地域で応援しようと、公民館とまちづくり市民交流プラザ、専門のアドバイザーが企画について話し合い、実施しました。

講座終了後、受講生が中心となつて「子育て中のママによる地域の子育て向上委員会」を結成。自分たちが企画して、子育ての息抜きになることをしようと話し合いを重ね、「託児付きのスポーツ講座があればいいのに」「公民館からメールで情報をもらいたい」「子どもと完全に離れる時間がほしい」といった率直



「子育ての息抜きになることをしたい」と話し合う子育て向上委員会のメンバー

子育ては「家庭で」とされていた時代から、「家庭はもとより地域、学校、企業、行政など社会全体で」の時代になっています。少子高齢化や核家族化の進行、家庭や学校・地域の関係の希薄化、情報化の進展、価値観の多様化…。さまざまな要因が、子育て環境に変化を与えているようです。こうした変化に対応しようと活動している、市民団体・グループ、企業などを取材しました。

な意見を出し合いました。昨年7月にオープンした「子育て広場びびよ」で、読み聞かせや手遊びをしている9人のボランティアも話し合いや託児に協力しています。二つの講座から次の活動が起こり、それを地域で支えていくという地域づくりが始まっています。

大河公民館
広島市南区北大河町15-12
TEL&FAX (082) 254-6731

子育て中の母親のための「子育て広場“びびよ”」でボランティアをする地域の人たち



未来へ向けて

広島市児童育成計画を改定中 検討委員会の公募委員に聞く

広島市は現在、子育て支援施策を推進するための基本指針となる「広島市児童育成計画」の改定作業に取り組んでいます。新たに向こう5年間の計画を立て、併せて、「次世代育成支援対策推進法」に基づく、「行動計画」の策定も進めています。

これまで、地域子育て支援センターの開設や、24時間365日対応の舟入病院小児救急診療、保育園の待機児童解消、136学区中102館におよぶ児童館の整備などの施策を展開してきました。

新たな計画づくりに、有識者や市民の声を反映させようと、大学教授や元小学校長、幼稚園長、弁護士、企業の労政部長などさまざまな分野の委員による検討委員会を設けました。昨年7月から、月1回ペースで会合を開き、検討を重ねています。公募による市民委員の桑田晴子さん、金子留里さんのお二人にお話を伺いました(取材は昨年11月)。

――委員に応募された理由は

桑田・金子 実際に子育てをしているのと、子育て支援活動をしているので、現場の声を反映させたいと思ったからです。

――現場の声を反映させると、子育て環境はどう変わりますか

桑田 みんなが、子育てをしている人を応援したい気持ちになり、男性も女性も、子どもが生れて良かった、と思えるようなまちになればいいなと思っています。計画の中にも、こうした方向に向けて市民の意識に訴えかけ

る要素がほしいですね。それと、男性の子育て参画です。企業では、女性が仕事と家庭を両立できるように後押しする動きがありますが、男性に対しては「男性の仕事と家庭の両立支援」の積極的な取り組みの視点がほしいです。男性も育児休暇が取れる社会システムができれば……。意識

変革と法律の整備を同時進行で考える必要があります。そして「子育ては女性の責任・家庭の責任」と決めつけるのではなく、地域や社会全体で「子育てを応援していく」という意識が広が

っていくことが大切だと思います。

金子 地域で支え合う拠点として、各区に1カ所程度、ファミリーサポートセンターがあればいいと思います。実際、子育てに困っている時に頼る先がない人は多いです。それと、いつでも利用できる常設のオープンスペースです。公民館や地域子育て支援センターなどにはありますが、開催日は月に1〜2回程度。働いている人が利用できる環境にはないですね。私は委員として、市に陳情だけをするつもりはありません。児童育成計画のどの部分で、市民活動として自分がかかわっているのか、確かめながらやっていきます。

桑田 子育ては大変だということは、昔から変わらないと思います。しかし、大変な中にも、楽しみや喜びがあります。市のアンケートでは、60%の人が子育てに不安を抱えているようですが、不安があつて当たり前です。「子育てに不安を感じることはいけないことだ」をベースにした計画づくりをする、とまずまず子育てを辛いものにしていきかねません。一番大切なことは、「子ども



桑田さんプロフィール
中区在住。「子育て・自分育で発信基地ピーターラビットの会」代表、CAP(子どもへの暴力防止)スペシャリスト。3児の母。

他都市で

呉市ファミリー・サポート・センター

もの人権の尊重」をベースに考えることだと思っています。その上で安心して子育てができる広島市をつくりたいですね。

金子さんプロフィール
中区在住。子育て応援ネットワーク「子育ておたがいさま〜ズ」代表、子育て支援サークル「げんき発信隊」代表、子育てオープンスペース「0123のぼりまち」スタッフ。3児の母。

ファミリーサポート事業は、子育ての援助を受けた人(依頼会員)と、援助を行いたい人(提供会員)が、お互いに助けたり、助けられたりする会員組織による相互援助活動で、センターは、依頼会員と提供会員双方のコーディネーターとなります。呉市は平成13年(2001年)度から実施しています。援助は、1時間当たり600円の有料制。昨年12月時点で、依頼会員は97人で、提供会員が271人(両方を兼ねる会員を含むと384人)。平成15年(2003年)度の活動件数は1680件でした。呉市子育て支援コーディネーターの中岡博美さんは「提供会員をさらに増やし、可能な限り依頼会員の要望に応えられるようにしたい」と話しています。ファミリーサポートセンターは、福山市や庄原市などにもあります。

子どもたちの
声を受け止める

18歳までの子どもがかけられるんわ
ひろしまチャイルドライン

082-273-0852

学校を通じて児童に配ったカード

18歳までの子どもを電話で支援 ひろしまチャイルドライン 子どもステーション

「けんかしたんだけど、どうしたら謝れますか」、「進路について親と意見が合わない」、「先生はいつも怒っている」……。受話器の向こうから聞こえてくる子どもたちの声にじっと耳を傾け、受け止めてあげる。それが「受け手さん」と呼ばれるスタッフの役割です。

チャイルドラインは1970年代半ばにヨーロッパ諸国で始まりました。日本では平成10年（1998年）に東京都世田谷区の市民団

体が、イギリスのチャイルドラインをモデルにスタートさせました。以来、34都道府県・60団体にまで活動の輪が広がっています（昨年11月時点）。ひろしまチャイルドラインは平成12年（2000年）3月に開設され、その後、特定非営利活動法人（NPO法人）の認証を取得しました。

ひろしまチャイルドラインには、子どもたちと直接、話をする受け手が50人います。ほとんどが女性で、養成講座を修了した高校生や大学生、OL、主婦で構成しています。ほかに受け手のサポート役となる「支え手」、アドバイザー、事務スタッフなど総勢70人で運営しています。設立から約5年間で、子どもたちからの電話は1万本以上。これまで電話が鳴らなかつた日は一日もなかつたそうです。電話内容で最も



子どもたちの声をしっかりと受け止めてくれます

多いのは、「学校関係」。特に友人や異性との関係に悩んでいる子どもの多さが、数字に表れています。上野和子理事長は、「ありのままの自分を受け入れてもらえず、自分に自信が持てない子が多いと思います。友人と信頼関係が結ばず、周りの大人に気を使わないで生活している子が多いのではないでしょう」と推測します。

受け手の仕事は、子どもにも解決策を与えるのではなく、解決する力を信じてひたすら話を聞き、まず受け止めてあげること。子どもの話に対して否定や評価、指示は基本的にしません。お互いが対等の関係で、子どもの自立をサポートする、という立場を取っています。

現在、電話を受けるのは毎週月・金・土曜日の午後3時～午後9時に限られ、



設立5周年を記念して、昨年11月にシンポジウムを開きました

電話料金を負担するのはかける側です。他県の事例を見ると、長野県では、チャイルドライン実施団体の運営に年間250万円の予算を組み、鳥取県は、現在の研修費支援に加えて来年度からの、フリーダイヤルの電話料金負担を検討しています。また、ヨーロッパ諸国の多くはフリーダイヤルで、電話料金は企業や市民の寄付で賄っています。

ひろしまチャイルドラインも将来はヨーロッパ諸国同様、子どもたちが電話代を気にすることなく、いつでもかけられる24時間対応、フリーダイヤル化を目指しています。そのために、県東部にもチャイルドラインを常設する準備を進めています。今年も1月20日から7日間、中国地方のチャイルドライン実施団体が協力して、フリーダイヤルキャンペーンをします（☎0120-726266）。



2年生と園児が一緒になって、どんぐりごま作りに挑戦しました

小学校に入学すると、大きな環境の変化に戸惑うせいも、落ち着いて授業を受けられない、時間や決まりを守れない、といった子どもが少なくないそうです。家庭での教育不足、異なった年齢の子どもと遊ぶ機会の減少、小学校に関する情報不足などが要因として挙げられます。そこで、広島市立安東小学校（松村繁校長）では昨年度から、学区内にある安東幼稚園、安田女子大学付属幼稚園、安東保育園と連携して、大きな環境の変化の段差を小さくするため、幼・保・小（1・2年生）の合同授業を通した、研究事業（文部科学省指定）に取り組んでいます。

昨年11月、安田幼稚園年長組70人が、安東小学校を訪問しました。体育館で待っていたのは2年生2クラス58人。園児と児童がペアになつて、どんぐりのこまやけん玉作り、いもづる遊びなどを楽しみました。松ぼっくりや割りばし、紙コップなどの材料を使って、作り方を教えたつたり、一緒に考えたりするなかで、互いにコミュニケーション

ションを図る機会が生まれました。これまで、幼稚園で一緒に遊んだり、七夕会を経験してきたので、すでに顔なじみです。

昨年度の合同授業を経験した園児の保護者からは、「幼稚園に入園した時はよく泣いて、慣れるまでに半年かかりましたが、小学校に入学した時は泣くこともなく、割りとすんなりなじめたようです」との声が聞かれます。益田博美教頭は、「昨年度の合同授業を経験して安東小学校に入学した児童で、ぐずつく子や不登校傾向になる子はいませんでした」と成果を実感しています。

昨年度は、一度交流した後、園児にも名前が読めるようにと、ひらがなの名札を作った児童もいました。相手



を思いやる気持ちが育まれているようです。

教諭と保育士の理解も深まり、新たな発見がありました。1年生を担任する久保山由江教諭は「幼稚園の先生は、子どもをとて細かいところまで見ているので勉強になります。困った時に相談すれば、アドバイスがもらえるようになりました」と話します。新1年生にはゼロから教えないければ、と思いがちだったのが、幼稚園・保育園児と接する機会を得て、子どもに対する考え方が変わり、これまで2・3学期から始めていた掃除や給食当番を、以前より早い時期に任せるようにしているそうです。

1年生と幼稚園児との「どろだんごづくり」。「きれいなだんごができました」とにっこり（1年生）



合同授業で
一緒に遊ぶ

就学前教育と小学校の連携を目指して 安東小学校の 幼・保・小連携教育